

日本学術会議第78回総会と米国スリー・マイル・ アイランド原発事故に関する学術シンポジウム

増田 善信*

日本学術会議第78回総会は10月24日～26日の3日間開かれたが、開会と同時に傍聴席にいた約20名の者が議場内に乱入し、議事を妨害した結果、当日14時30分まで議事を中断せざるを得ないような事態が発生した。彼等は、米国スリー・マイル・アイランド(TMI)原子力発電所の事故の問題で日本学術会議が原子力安全委員会と共催で学術シンポジウムを開催するのは政府の原子力行政に手をかけ、原発推進に道を開くものだと総会の流会をねらったものである。

世界に衝撃を与えたTMI原発事故は現在の原子力発電の安全性、将来性について根底から問い直すべき諸問題を提起しており、広範な科学者がその英知を結集して学際的、総合的にその根源を究明し、今後とるべき方向を明らかにすることが望まれていた。学術会議の「科学者の内外に対する代表機関」として「科学を行政・産業・国民生活に反映させる」という性格からいっても、この問題を学術会議がとり上げるのは当然である。

ところが「反原発」を叫ぶ一部の人達は、このシンポジウムは安全委員会の行う「公開ヒアリング」であり、非公開で学術会議の自主・民主・公開の原子力利用三原則に反しており、パネラーに反原発の学者を加えないのは片手落ちだ等とって妨害したのである。

学術会議は、この種のシンポジウムを真に実りあるものにするには、原子力の研究・開発利用にどのような立場をとるかに関係なく、出来るだけ広範な科学者を結集し、しかも純粋に学問的な討論の場を保障するべきであると考え、参加者は学協会に所属する科学者、研究者なら誰でも参加できるようにするとともに、パネラーも原発賛成・反対で色分けせずシンポジウムに最もふさわしい人を選ぶべきであり、公開の問題も会場の都合で往復葉書で申込んだ先着600名に入場券を出す方向であり、もちろんマスコミには公開されていた。従って、彼等の言い分は全く道理のないものであった。総回第2日目には彼等の言い分も含めて十分審議がされ、TMI原発事

故問題でシンポジウムを開くことがほとんど万場一致で決められた。

なお、今回の総回ではこのような一部の妨害者の行動だけが大大的に報道されたが、学術会議ではこの他にも非常に重要なことが審議された。すなわち、丁度「原子力研究・利用三原則」の声明が出された25周年にあたるので、「本会議が提唱した三原則（公開、民主、自主）を要求する声明は、その後わが国の原子力の研究と利用のよりどころとして大きな役割を果たした。（中略）今日改めて三原則のもつ重要性を認識し、その精神が正しく継承発展されるようここに広く訴えるものである」という声明を発表した。また、「基礎数理研究所」（仮称）の設置、および献体登録に関する法制化の促進についての勧告が採択され、研究機関における地震による災害防止対策と学術刊物の郵便料金についてそれぞれ要望書が可決された。

TMI原発事故に関する学術シンポジウムは、11月26日午前9時30分から開かれた。しかし、やはり「反原発」を叫ぶ一部の人達に妨害され定刻より一時間もおくれで開会した。一般のマスコミは妨害分子のことだけを大々的にとりあげ、シンポジウムの内容をほとんどとりあげなかったのが残念である。シンポジウムでは、参加した科学者の立場の如何を問わず、TMI原発事故が極めて深刻な意義を原子力開発に対して持つものであり、原子力の安全性の根幹に立ちもどって考えるべき性格を示すものであることが、共通の認識になった。また、一般の科学者が、原子力施設の安全性を事実即して究明できるよう、原発事故情報の収集、蓄積、整理、公開のシステムの強化を図ることの緊急性について、パネラーの多くから意見が出され、情報公開法の制定について積極的な問題提起が出された。このように、このシンポジウムは色々の妨害にもかかわらず成功裏に終り、引き続き社会科学的分野からのTMI原発事故問題についてのシンポジウムを開くことが原子力安全委員会と合意されている。

* Yoshinobu Masuda, 気象研究所